

令和5年4月21日
国立研究開発法人水産研究・教育機構

最近のマサバ（太平洋）の資源の状況及び不漁の要因について

- 1 水産研究・教育機構が公表している最新の資源評価において、マサバ太平洋系群の資源量は多いと評価しています。マサバ太平洋系群の資源量は、2000年代は15万トンまで減少していましたが、2022年には507万トンまで増加しています。
- 2 調査船調査による産卵量（親魚量の指標）や北太平洋における0歳魚分布量（加入量の指標）を見ても、近年は、2000年代と比較して多くマサバ資源が増加していることを示しています。
- 3 一方で、2022年の日本の漁獲量は、常磐・房総海域におけるまき網漁船などの漁獲量が大きく減少し、漁期も短期化しました。
- 4 水産研究・教育機構では、資源量が多いにもかかわらず漁場形成が不調になっている要因としては、マサバの南下回遊期における海洋環境の変化、具体的には、以下（1）及び（2）によるものと推定しています。
 - （1）秋季から冬季にかけてのマサバの南下回遊期において、親潮が弱勢化し、三陸沿岸への張り出しが弱くなった結果、マサバの南下回遊経路が沖合化した可能性。
 - （2）さらに、黒潮続流が沿岸寄りかつ北向きに変化したことにより、日本近海の漁場における水温低下が阻害され、漁場への回遊時期の遅れや漁期の短期化が発生。
- 5 しかしながら、マサバは我が国水域の外側の公海まで分布しており、公海の水域で操業する外国漁船による漁獲量の特段の低下は見られておらず、現時点においてもマサバ資源の状況は高い水準で推移していると考えられます。
- 6 水産研究・教育機構としては、海洋状況の把握、それがマサバ資源にどのような影響を与えるのかも含め、資源調査を継続してまいります。

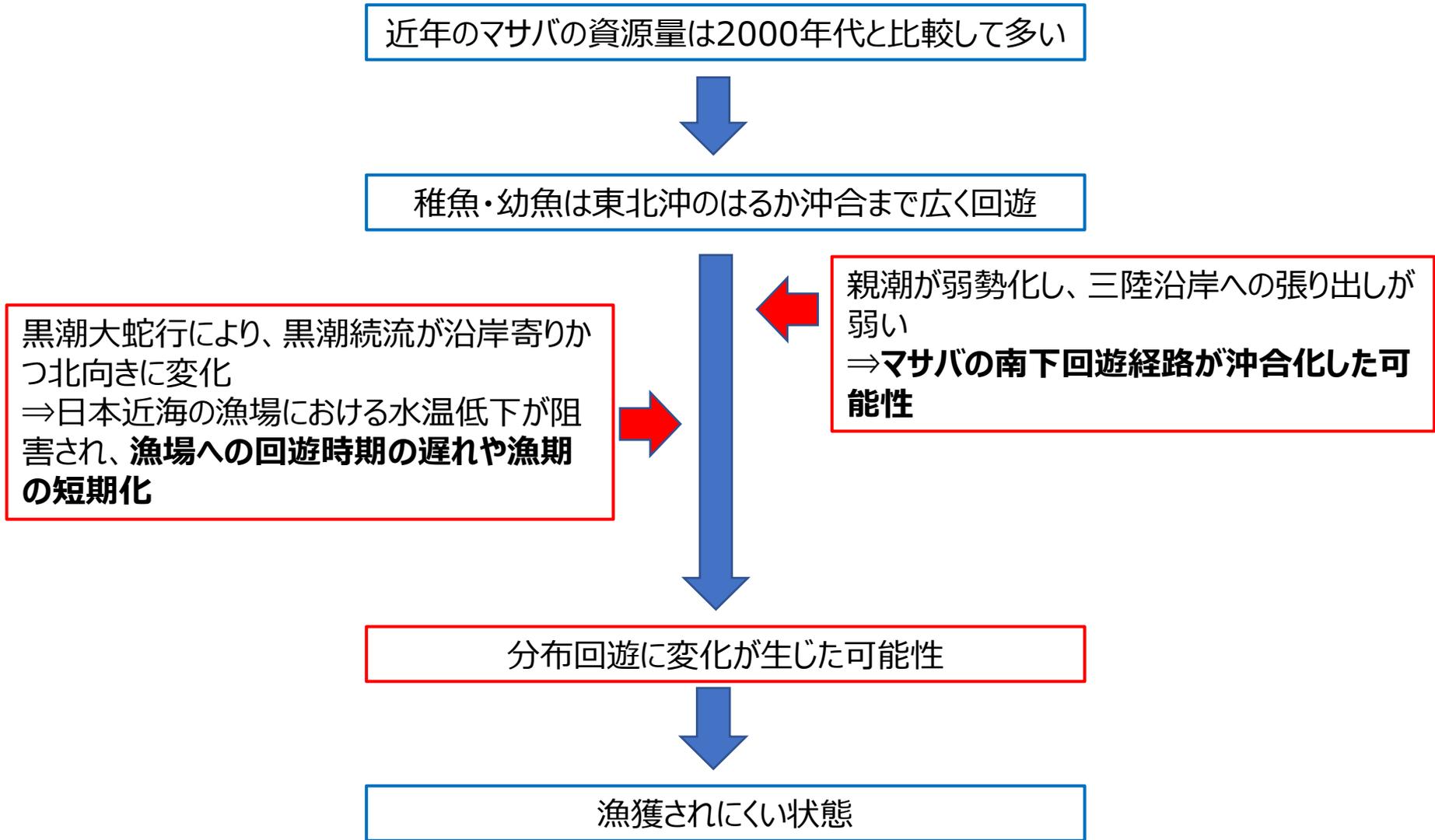
【連絡先】

水産研究・教育機構 本部 広報課

担当：荒井

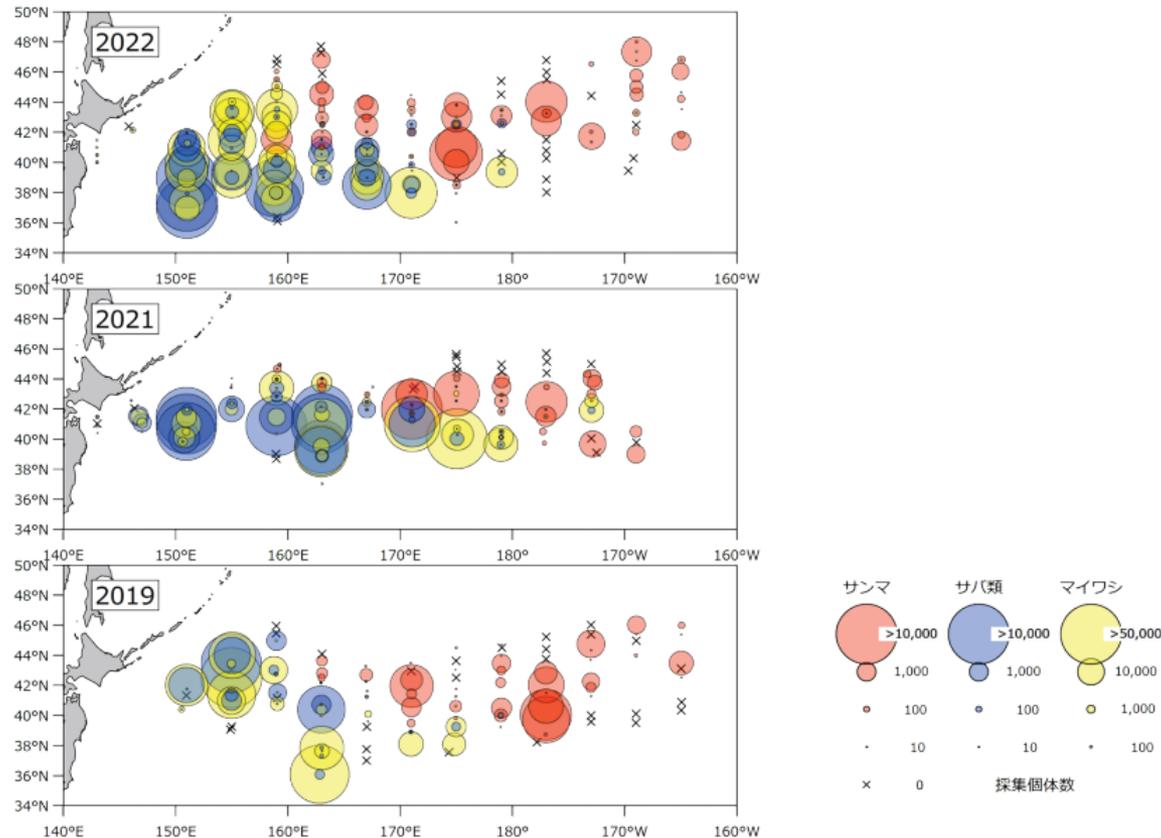
e-mail: fra-pr@fra.go.jp

1. マサバ (太平洋) の不漁要因



2. サバ類など小型浮魚類の夏季の北西太平洋における分布

- サバ類、サンマ、マイワシ等を対象とした資源量直接推定調査（6～7月）は2003年から毎年継続的に実施しており、マサバの2013、2018、2021年生まれ群が多いこともこの調査で早期に把握されました。
- 2022年夏季においても、調査海域の南西側においてマサバの分布量は多かったことから、漁場形成の不調は資源量減少に起因するのではなく、海洋環境の影響によるものと考えられました。



サンマ資源量直接推定調査（6～7月）で採集されたサンマ（赤丸）、さば類（マサバおよびゴマサバ；青）およびマイワシ（黄色）の採集個体数。3種とも採集されなかった調査点は×で示した。

3. マサバ太平洋系群の漁場形成の不調

- 親潮の三陸への張り出しが弱く、分布が沖合化した可能性。
- 黒潮続流が沿岸寄りに流れることで、漁獲されにくい状態が発生した可能性。

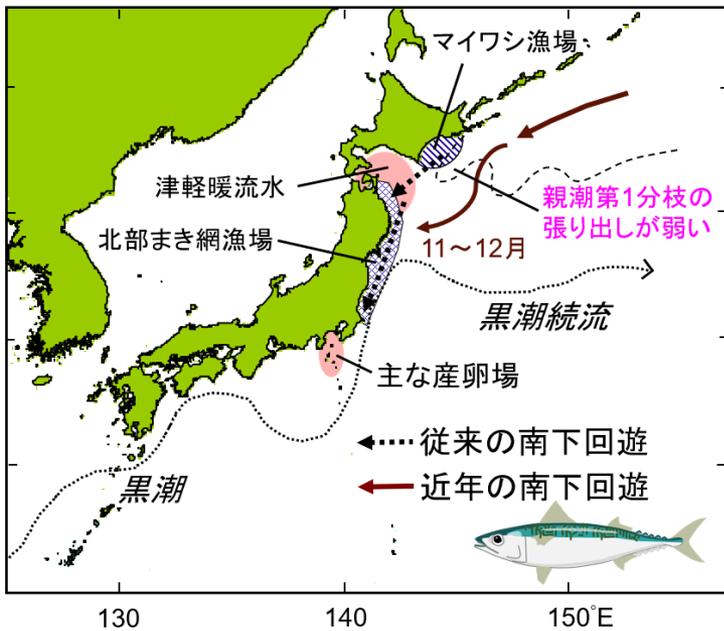


図1 漁場への南下回遊概念図
従来と近年の比較

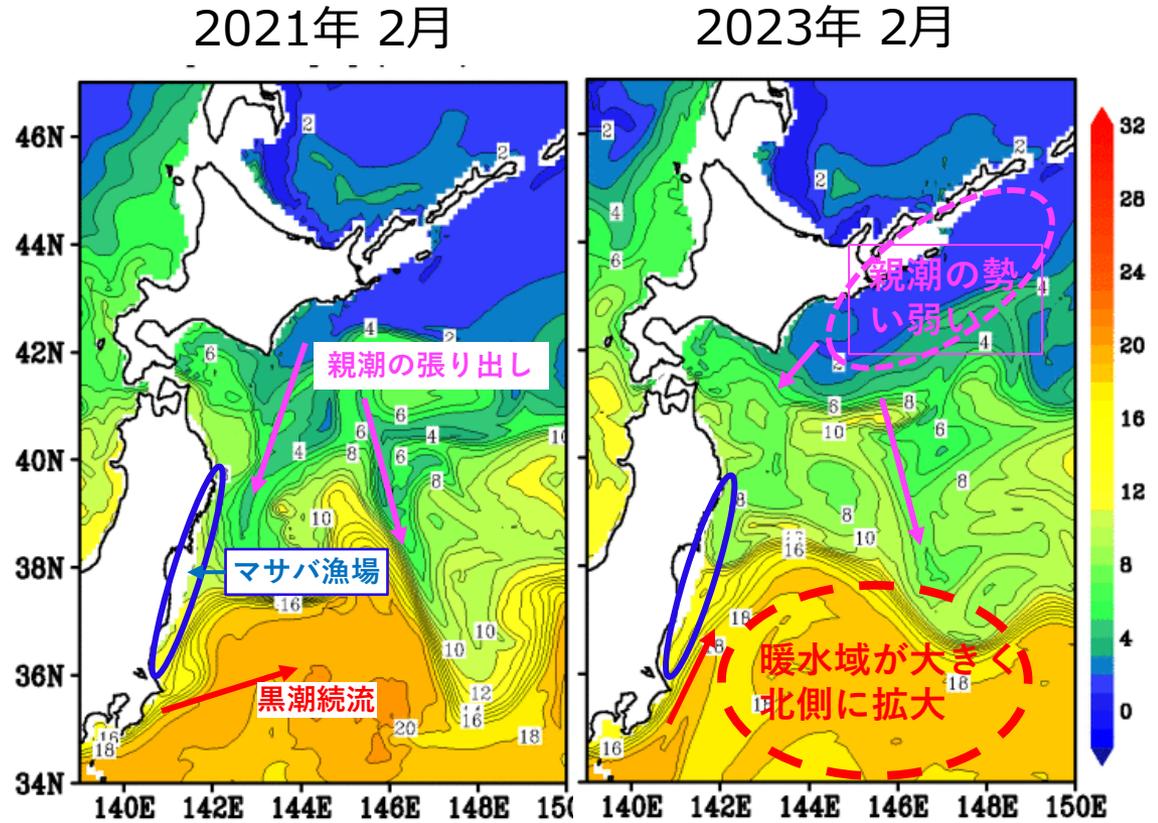


図2 2021年、2023年2月1日の水温
(水深100m) FRA-ROMS IIにより作図